

福島ダイアログの活動から 福島の将来像を再考する

NPO福島ダイアログ 理事長：安東量子



NPO 福島ダイアログ

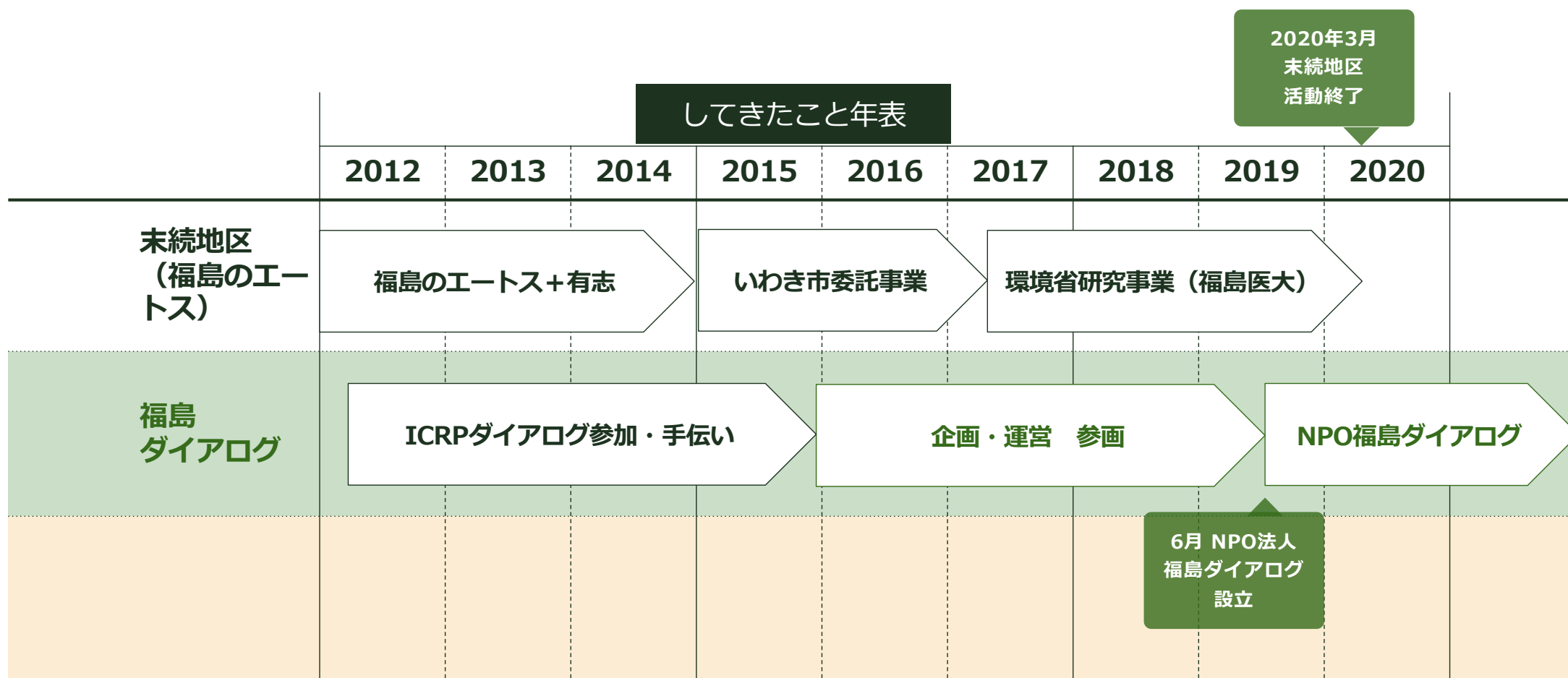
info@fukushima-dialogue.jp

<https://fukushima-dialogue.jp>

<https://fukushima-dialogue.jp/en/>

福島県いわき市在住（2003年～） 広島県出身 筑波大学比較文化学類卒

作家・NPO福島ダイアログ理事長（放送大学大学院文化科学研究科 修士課程）



Ethos in Fukushima 福島のエートス

<http://ethos-fukushima.blogspot.com/>

2011年ー2022年

いわき市久ノ浜末続地区での活動

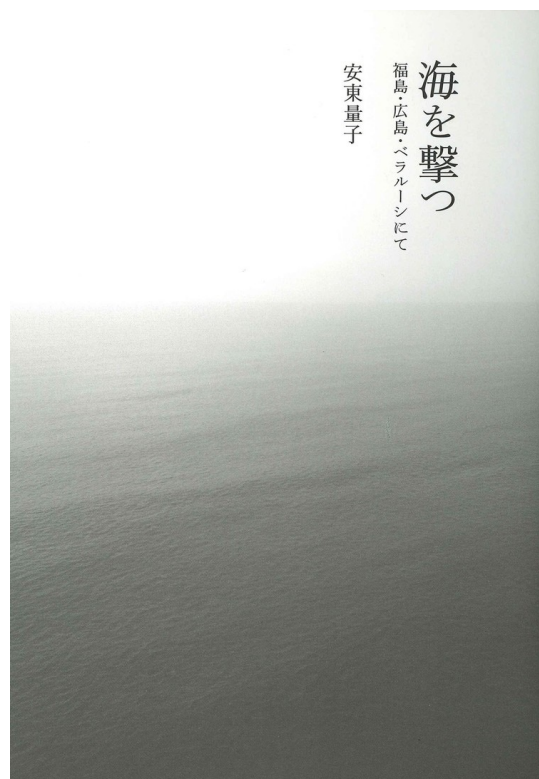
ICRP・福島ダイアログの記録

NPO 福島ダイアログ

<https://fukushima-dialogue.jp/>

2019年ー

福島ダイアログの記録ほか



『海を撃つ ―福島・広島・ベラルーシにて』2019 みすず書房



『末続アトラス 2011-2020：狭間の地域が暮らしを取り戻す闘いの記録』2022 福島のエートス （PDF無料DL可）



『スティーブ&ボニー 砂漠のゲンシリョクムラ・イン・アメリカ』2022 晶文社

本日の概要

- ① ざっくりとした原発事故後の時間のふりかえり
- ② 久ノ浜地区末続での活動紹介
- ③ 福島ダイアログの活動紹介
- ④ 福島ダイアログの今後と福島の将来

1. ざっくりとした原発事故後の時間のふりかえり

事故からの変遷

PHASE I : 2011～2014年

2011年3月11日 東日本大震災

2014年3月 田村市都路地区避難指示解除

混乱期：事故の社会的混乱が収まらず、行政制度も整っておらず、すべてが手探り。国内外の様々な人がかわり非日常的な雰囲気。

PHASE II : 2015～2017年

2015年9月11日 楢葉町避難指示解除

2017年3月・4月 帰還困難区域を除いて避難指示解除

解除激動期：避難指示の手続きが徐々に定まり、ルーティン化。自治体が主要アクターとして存在感を強める。解除区域に人が戻らないことが問題になりはじめる。

PHASE III : 2018～2021年

2017年末～ 6自治体の特定再生復興拠点着工

2021年4月 処理水海洋放出決定

停滞・バックラッシュ期：避難指示解除が自己目的化。事故以降に積み上げられてきた様々な放射線防護や意思決定手続きも形骸化、放射能対応や事故の影響を軽視する雰囲気が優勢に。

PHASE IV : 2021年～

2022年 特定復興拠点の解除（双葉・大熊）

ばら撒き狂騒期：これまでの復興政策の矛盾や放置してきた課題が表面化しはじめる一方、有効な手立てもなく自治体単位の過剰なばら撒き

PHASE I

未曾有の事故による衝撃
広く国内外の多様な人たちの関心
試行錯誤の模索



PHASE IV

時間の経過による慣れ
関心の薄れと思考停止
排他性

喧騒
緊張感
模索
多様性

無関心
弛緩
惰性
閉塞

- 全体的な見取り図を作らないまま走り続けたため時間の経過にしたがって、もともとの日本の統治のあり方の問題がそのまま表面化することに
- 外部からの支援や資金が減るごとに 復興予算のみに頼った行政差配の単相的復興になり多様性も失われた
- 原発事故からの復興の特殊性にあわせた体制作りもできないままだったので、緊張感が薄れるごとに、特殊性を考慮しない旧態依然のトップダウン、ばら撒き、縦割りの再開発型復興へ
- 原発事故直後に放射能を過剰忌避したことへの反動から、放射線防護を一切無視するかのような風潮となり、事故後の測定活動の成果もまったく生かされていない

2. 末続での リスク・コミュニケーション活動 自分が主人公である暮らしを取り戻す

1. 末続地区概況

東京電力福島第一原子力発電所からは、およそ27.5km

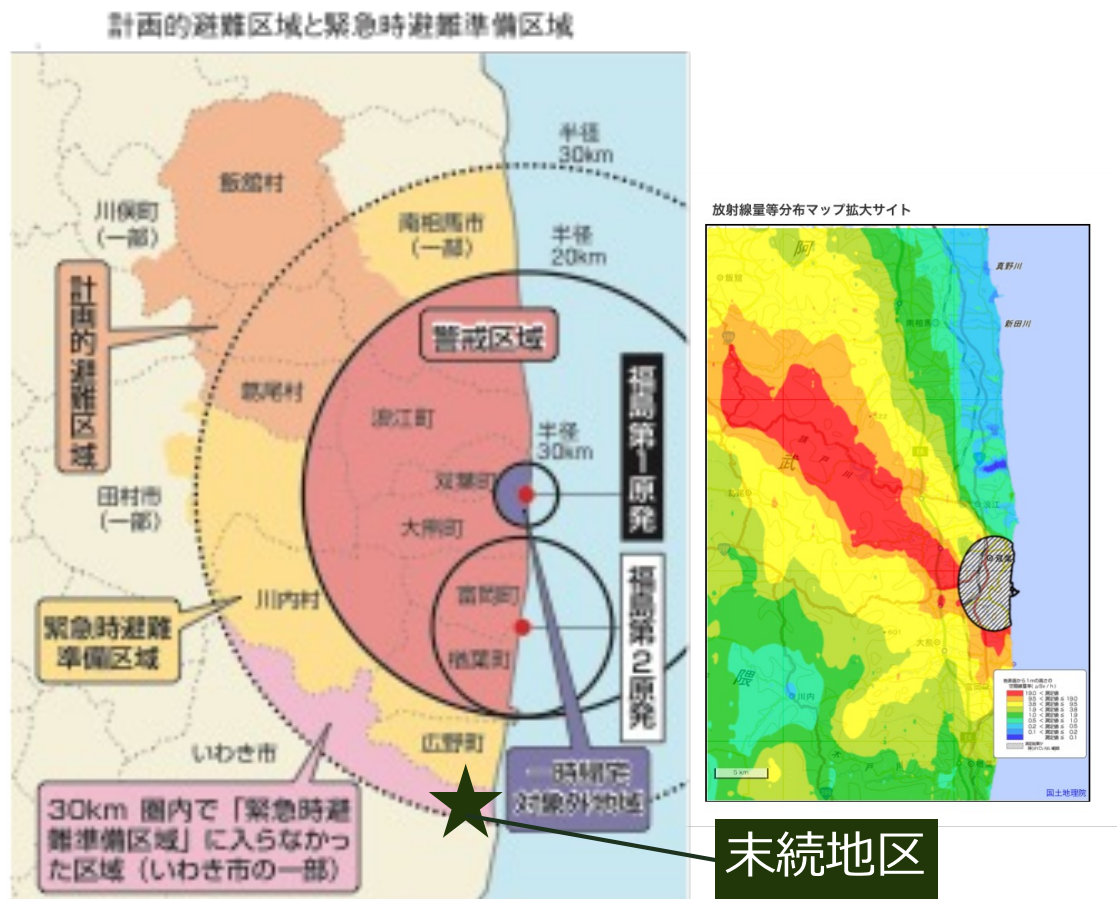


- 面積およそ7.4km²
- 2011年3月時点の住民数
118世帯 386人
- 地域の多くは3世帯同居の兼業農家
- 米、野菜は自家栽培している世帯が多かった

* 国土地理院の地図をもとに作成

2. 2011年3月 東日本大震災と原発事故後の状況

海岸沿いであるため津波の被害も大きかった



- 津波による死者7名
- 損壊家屋 14世帯
- 3月13日 いわき市による自主避難要請
バスの手配→ほぼ全住民が避難
- 3月14日 政府による屋内退避区域指定
- 3月21日 区域指定解除
- 高齢者世帯を中心に帰還

* 震災記録誌「いわき市・東日本大震災の証言と記録」より

末続地区の状況 —“見捨てられた末続”



3. 原発事故直後の日本社会の状況

長らく「日本では原発事故は起きない」との「安全神話」が蔓延していたこともあって
事故の衝撃は非常に大きかった

- 政府、東電、専門家への不信
- 放射線リスクと原発賛否をめぐって大きく割れる世論
- リスクをめぐって身近な人間関係へも大きな亀裂
- 先行きの見えなさに対する強いフラストレーション

。これから何をしてゆけばよいのか
見えない どうすればいいのか
。数値の意味が分からない
。事故以前の放射線量が
分からない
。もともと住んでいた場所に
帰りたいというのが原点か？
。そのために何をすればいいのか？
。若い人がいなくなると農業も続かない
孫たちと暮らしたい
。100ミリシーベルト以下の健康影響
は、はっきりしていない
。食べものの影響が心配
495と506のちがいはどうなるのか
。自らのことより子どもたちのことが心配
。子どもが安心して暮らせる基準は？
。気持の問題としてこの放射線量は

4. 末続地区で事故後に問題になったのは

地元の人にとって最初に問題となったのは それまであたりまえにできていた
「暮らしの仕方」がわからなくなったことだった

放射能をめぐって

- 生活圏のなかで どこが安全か危険かわからない
- 隣の人がどう考えているかわからない
- 作物を育てていいか 食べていいかわからない
- 誰の言っていることを信じていいのかわからない



行政の施策対応による影響

通常は新聞やテレビ、ニュースで眺めているだけの政府や行政の施策が日々の生活に直接
ふりかかってくるようになった

政府の施策をめぐって

2011年3月区域指定解除

2011年8月 除染特措法

2012年4月 食品基準の改定

後出し基準がさらなる不信

■ 放射性物質汚染対処特措法（除染特措法）

除染の**長期的目標**を年間1ミリシーベルトとし、除染対象地域を空間線量で毎時0.23マイクロシーベルト以上の地域とする。

■ 新食品基準

事故直後の暫定食品基準値は、1キログラムあたり500ベクレルだったが、ほとんどの食品で年間1ミリシーベルトを目安として、100ベクレルに設定。

■ 基準が「危険」と「安全」の境目に

政府の基準は、「施策対応」をとるための基準に過ぎなかったが、放射線の事前の情報もない状況で、安全と危険の境目と認識されるようになった

5. 生活の自律の回復を目指した測定活動

日々の暮らしのなかで、話す、測る、話す、測るを繰り返して、自分たちの状況を把握し、
自分に最適の対応方法や相場感を身につけていくことをめざす

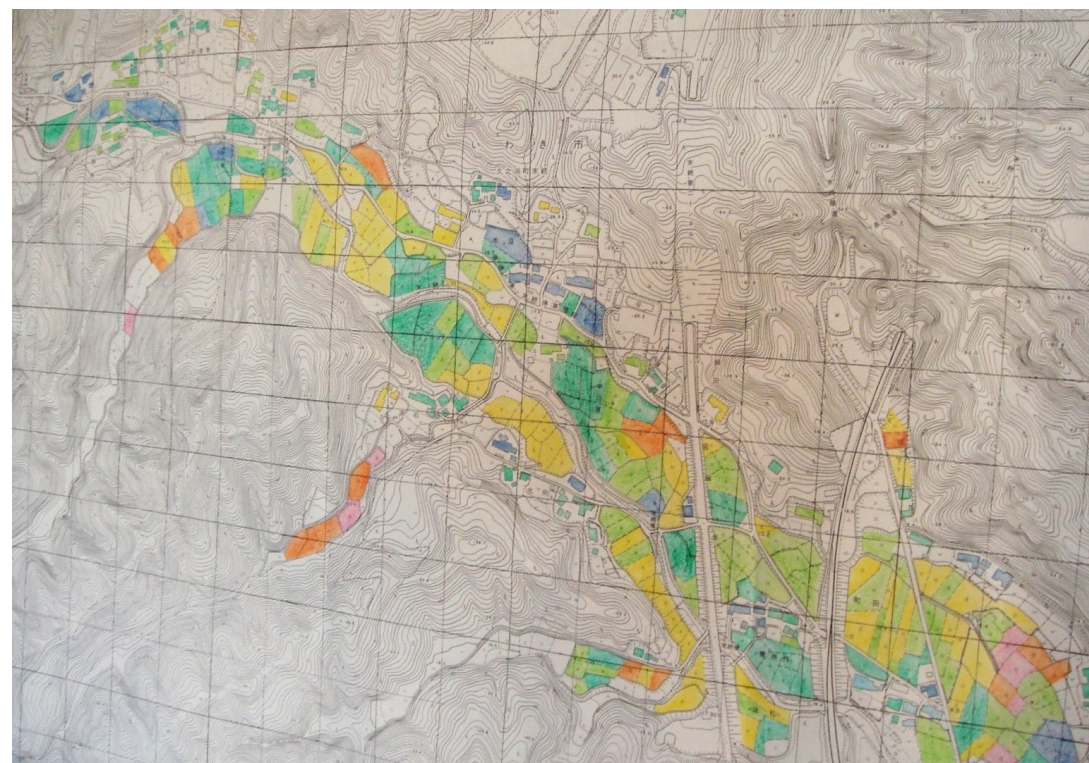
末続地区有志による放射能地図作成

2011年8月 有志の測定よびかけ

2011年11月 空間・土壌測定開始

2012年 3 月 放射線地図作成完了

2012年3月 福島のエートス協働



* 提供 末続地区ふるさとを守る会 土壌放射線地図

末続地区で行われた測定プロジェクト

事故後の生活空間のなかで 空間線量・土壌濃度以外に大きな問題になるのは

①外部被曝 ②内部被曝 ③食品



外部被曝

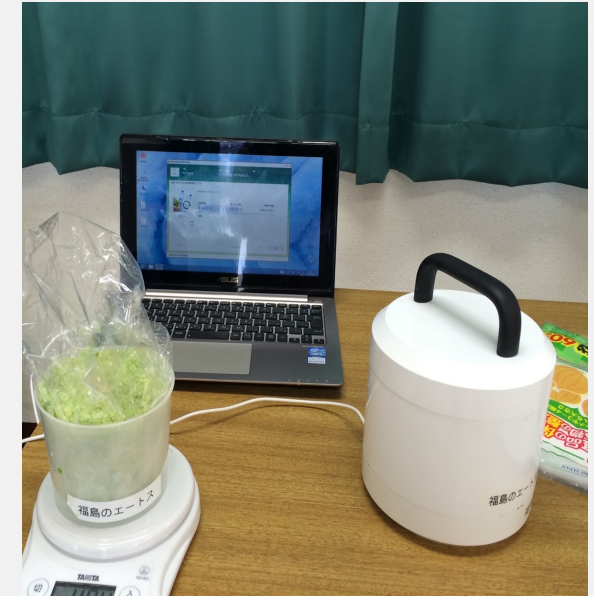
- 携帯型個人線量計を使用
- 生活空間での外部被曝を測定
- どこに行けば高くなるかを可視化
- 地区内で最大120名が参加



内部被曝

- ホールボディカウンター（WBC）
- 体内に取り込まれた放射性物質とそこから換算される被曝量を測定
- 地区内で最大120名が参加

Fukushima Dialogue

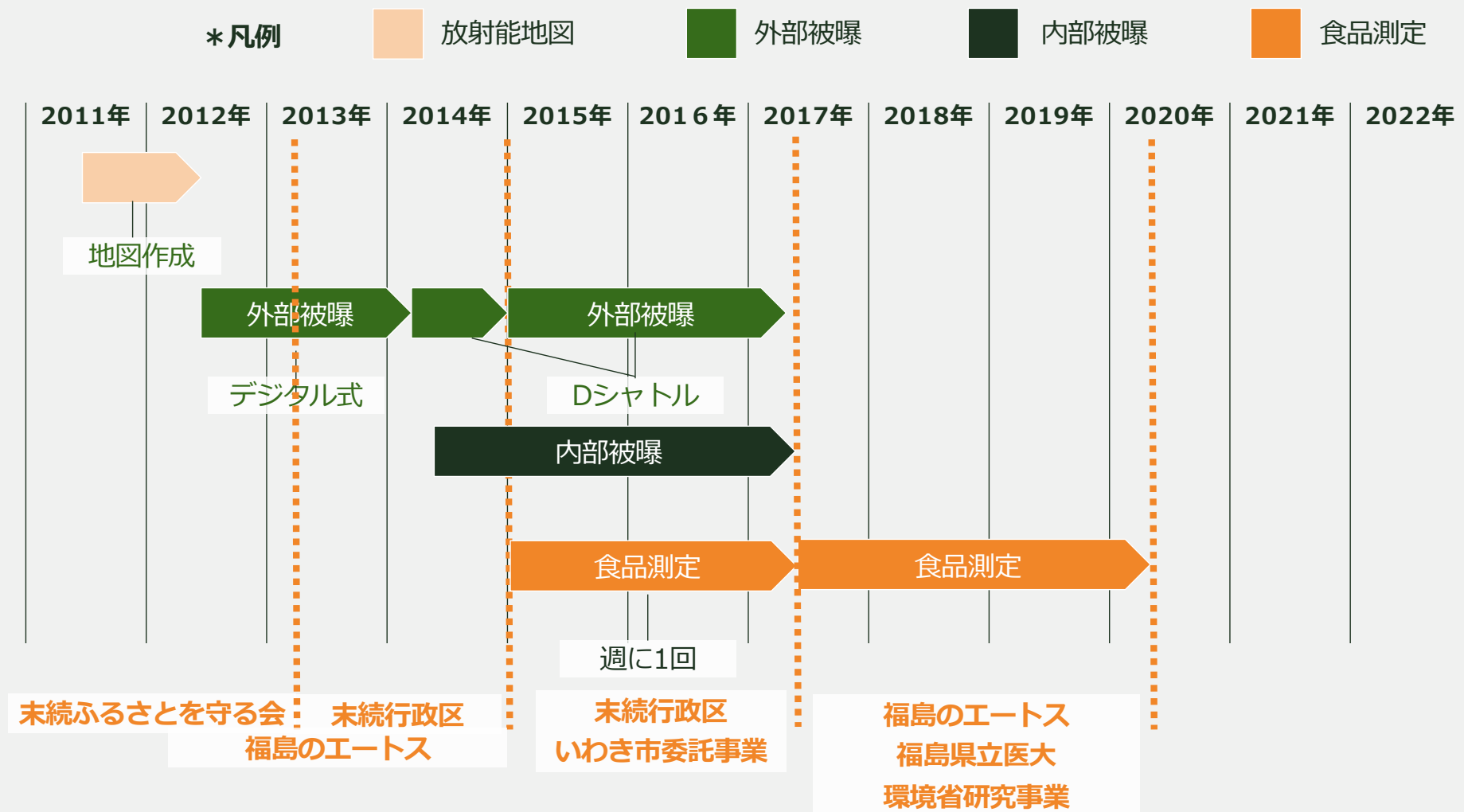


食品測定

- シンチレータ式測定器を使用
- 週に一度地区内の集会所で実施
- 持ち込み自由（自家野菜が中心）
- 放射線相談員が常駐、コミュニケーションの場にもなる

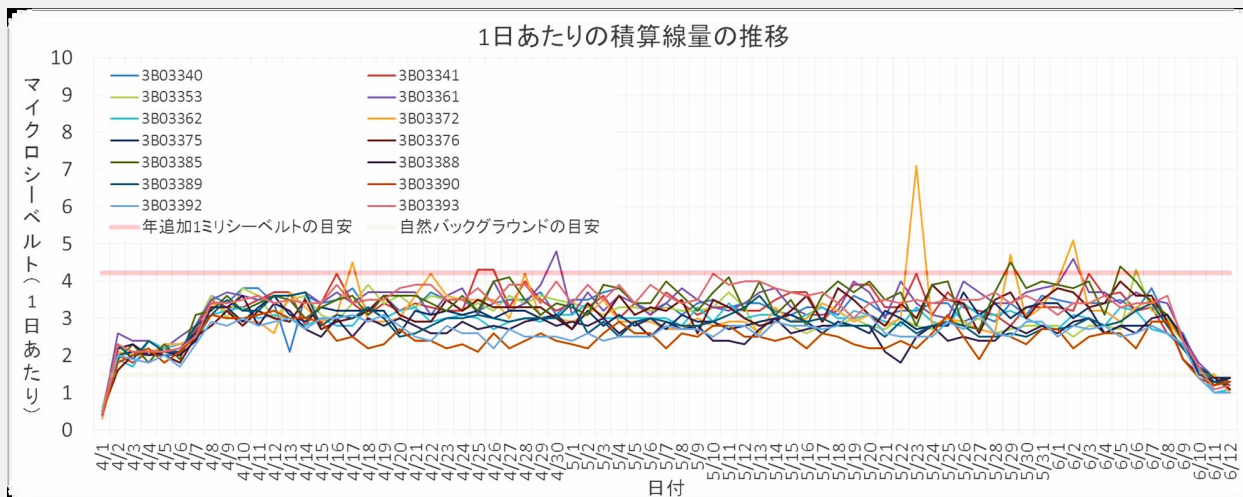
未続地区で行われた測定の順番

事前の工程表があったわけではなく 必要に応じて また 可能になった順から進めていきました

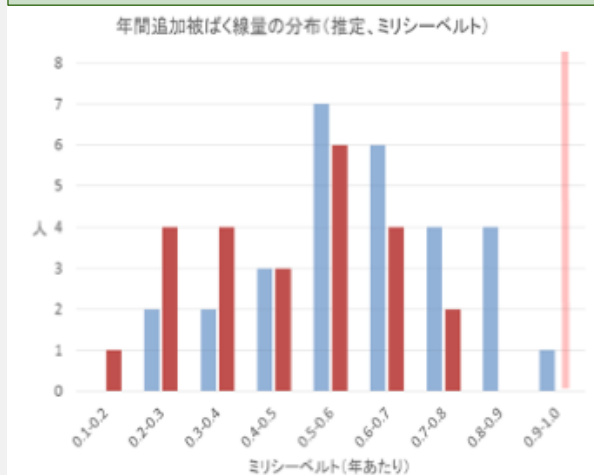


地域の放射線量 被曝量の全体像が見えるようになった

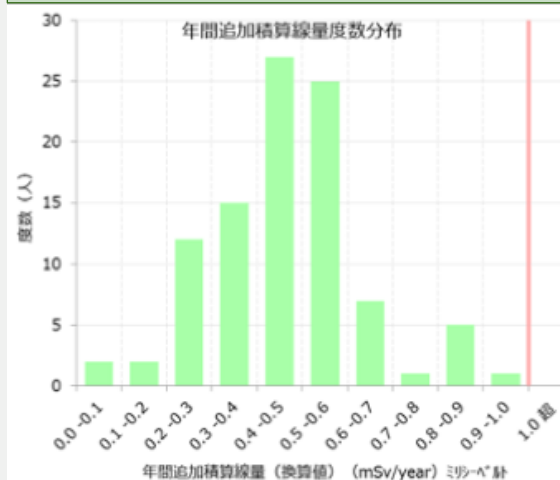
2014年外部被曝線量



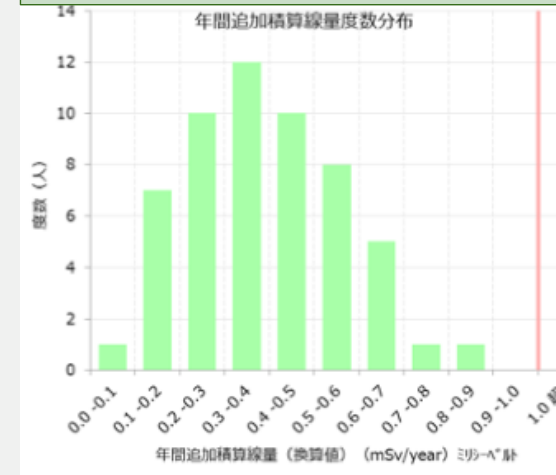
2014年前半(赤)・後半(青)



2015年



2016年



測定結果を地域で共有

測定の結果は 必ず地域で共有できるように話し合いの場を設け 「すえつぎだより」に掲載

平成27年7月20日発行 第二号

「すえつぎだより」
第2号、出来上がりました。

すえつぎだより
編集
安東量子
鈴木伴栄
門馬麻衣子
放射線の理解
を深める地域
モデル事業

春を告げる4月、見渡神社のお祭り。田植えで忙しい5月、今年も末続駅のつじが見事な花を咲かせました。いつもより早くアジサイが咲き始めた6月、多くの人の目を惹きつけて、アジサイが終わりを迎えた7月。山に目を向ければ、ねむの木には可憐な花が咲き、季節はもう夏。

今年も咲きました！

「今年の紫陽花は、いまひとつ」と言いながら、今年も美しく咲いた遠藤豊さん宅の紫陽花。

個人線量結果説明会
6月21日、好間町の福島県労働保健センターいいわき好間コミュニティ健康プラザで放射線内部被ばく測定検査機(WBC)・ホールボディカウンタによる検査が行われました。地区の皆さん47名が受診。6月30日、末続集会所で福島県立医大高崎真先生によるWBCの結果説明と末続地区内100名に配られたDシャトルによる4月5月2ヵ月分の個人外部被ばく量測定結果説明も行われました。

5月から7月にかけては、1年で最も色鮮やかな花々に末続が覆われる季節です。末続駅のツツジも今年も明るく花開きました。常磐線の本数も、少しずつ増えて、今は、二日に上り13本、下り14本が走ります。きつと、電車の中から楽しんだ人もいたことでしょう。

食品測定日(火)にあわせて、宮崎先生にご来訪頂きました。自分の測定結果を手に和気あいあい。

食品測定(週に一度)



測定結果説明会



地域から徐々に聞こえてきた声

すえつぎだより

2015～2020年
発行頻度：年に3～4回
発行号数：15号
発行部数：120部（世帯配布）

内部被曝測定

2014～2017年
頻度：年に2回（春・秋）
実施回数：7号
最大参加者数：120名

外部被曝測定

2012～2017年
2014年からDシャトル使用
最大稼働数：130名

食品測定

2015～2020年
毎週火曜日（1～3月隔週）

これは食べていいのか？ どのように食べればいいのか？



こうやったら放射線量は減るんだよね この食品は出やすいから確認しにきた これくらいなら平気かな／やめとくかな WBCでも確認した 確認したから大丈夫だよ

末続は危ないのではないかな？

原発から放射性物質が飛んでくるのではないかな？



土地が安全だとわかったから安心して暮らせる 測定器を持っていればなにかあったときに自分で判断できる 証拠も残せる

自分たちはわかっているけど 他の地域の人たちはわかってくれない
孫や子供たちが遊びにきてくれない



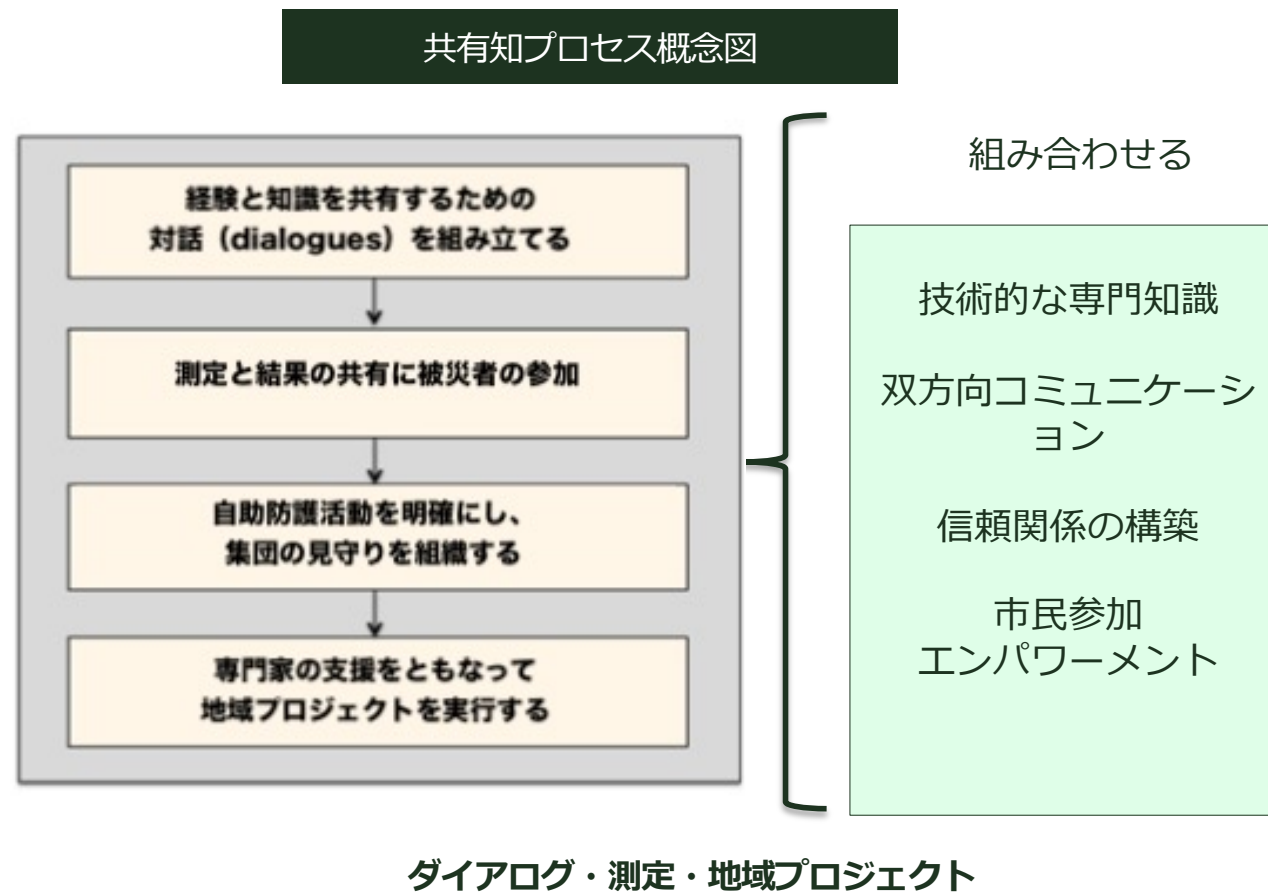
自分で末続だよりを子供や孫に見せて伝えた 自分から声をかけたり、伝えたりできるようにならなきゃね 子供達も感心していた

いちばん重要だったのは

地域とひとりひとりの住民の暮らしの
主体性と自律性を回復すること

6. 共有知プロセス co-expertise approach

未続地区で行われたタイプの取り組みは、専門家と地元が取り組みをともに行う「co-expertise (共有知) プロセス」とよばれています



* 参考資料： J.ロシャル、安東量子他「福島県いわき市未続地区における原発事故後の共有知の経験」保健物理 2021年56巻1号 <https://doi.org/10.5453/jhps.56.39>

: ICRP Publication 146 「大規模原子力事故における人と環境の放射線防護 — ICRP Publication 109 と 111 の改訂」
Fukushima Dialogue

7. 測定では解決できないこと

コミュニティでの測定活動は コミュニティ内の暮らしを立て直すには強力なツールでしたが それだけでは解決しない問題も多く残されました

不公平感

- 事故前には存在しなかった放射線が自分たちだけ上乗せされた
- 政策的な線引きによって不公平感が上乗せされた
- そもそも原発の電気は東京電力管内に送られており 自分たちは使っていなかった

風評

- 風評は 英語では stigma と呼ばれ、社会心理学的な背景のある複雑な社会現象
- 福島に限らず、これまでも狂牛病、ダイオキシン、東海村臨界事故等繰り返し問題になってきた
- 一度固定化すると回復は容易ではない

意思決定からの疎外

- 除染対応を含め、政策が日々の暮らしに直結するにもかかわらず 自分たちは意思決定に加えてもらえない
- 局面が変わるたびに実施される政策が、毎回、生活を振り回すことになる
- 「復興」に求めるものがそもそも行政（国、自治体）と住民によって違う

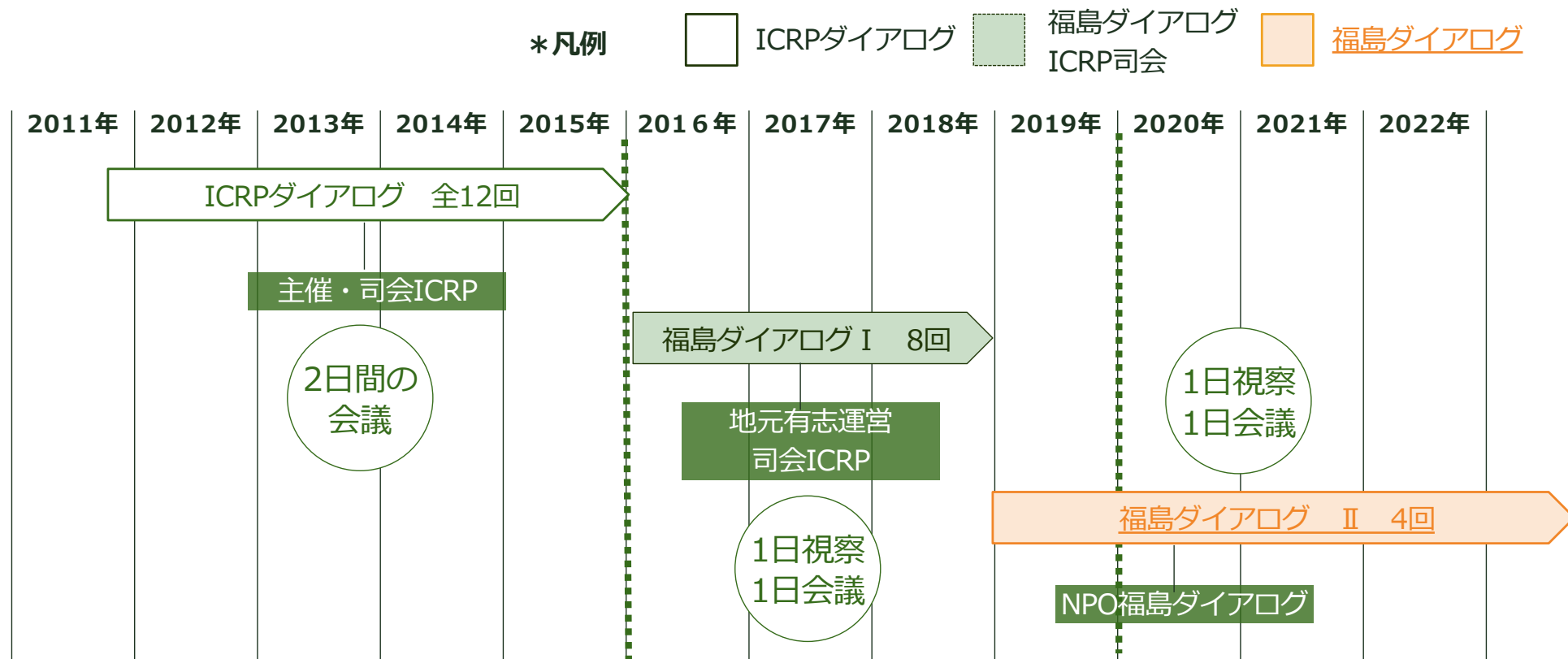
- **コミュニティの「外」との関係性における課題**
- **科学知識が生活に直接影響を及ぼすときに不可避となる
価値判断と意思決定の問題**

3. 福島ダイアログ

自分「たち」のことを 自分「たち」で考える

1. ICRPダイアログセミナー ▶ 福島ダイアログ

ICRPが 2011年から ICRPダイアログセミナーの名称ではじめた対話集会
2016年から福島ダイアログに名称を変更 地元による運営に



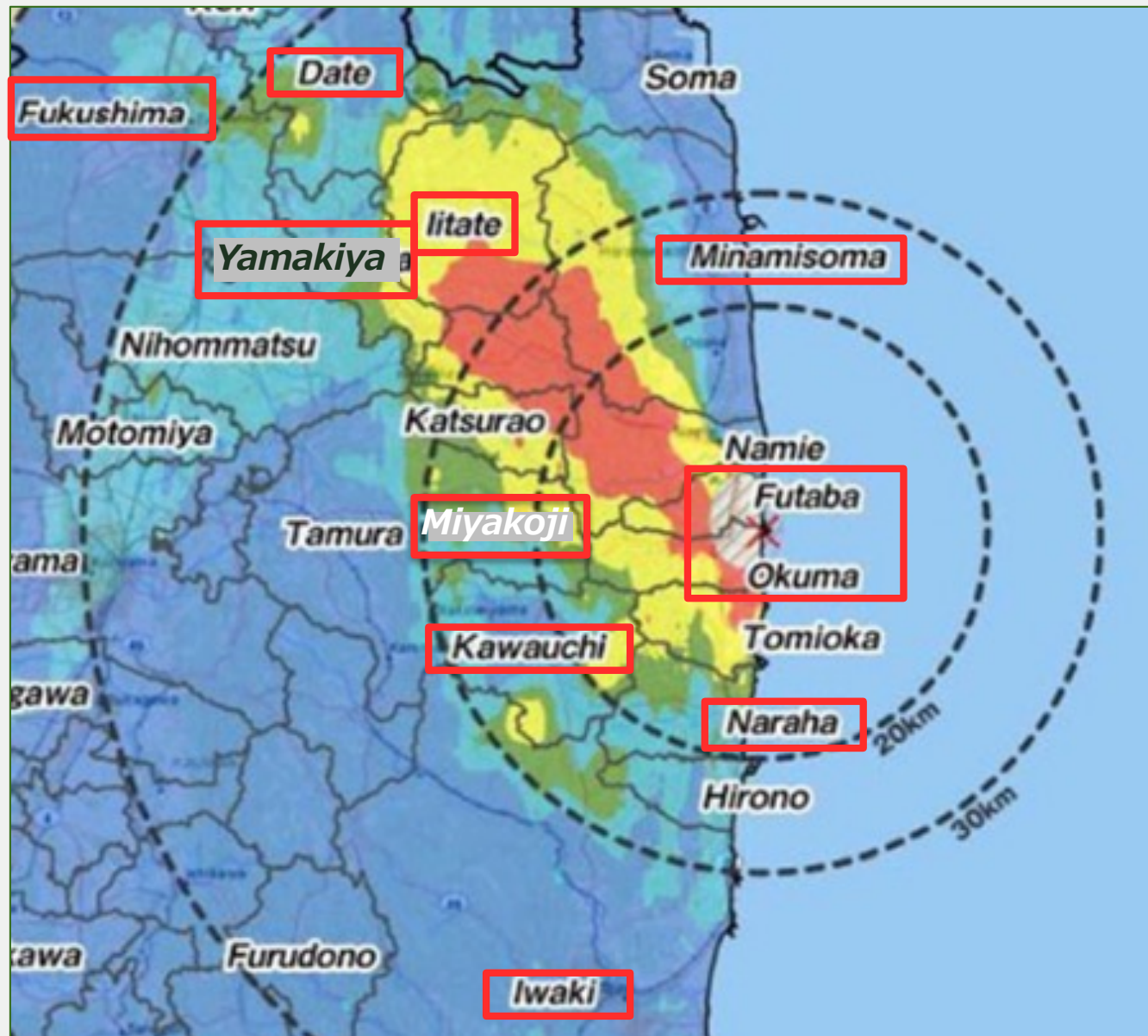
ICRP 福島ダイアログ

表2 福島ダイアログの開催テーマ一覧 (2011～2019年)

回	議題	開催日	場所
1	チェルノビル事故の教訓と ICRP 勧告	2011年11月26日、27日	福島市
2	伊達市ダイアログセミナー	2012年2月25日、26日	伊達市
3	食品についての対話	2012年7月7日、8日	伊達市
4	子供と若者の教育についての対話	2012年11月10日、11日	伊達市
5	帰還—かえるのか、とどまるのか—	2013年2月2日、3日	伊達市
6	飯館—問題の認識と対応—	2013年7月6日、7日	福島市
7	いわきと浜通りにおける自助活動—被災地とともに歩む	2013年11月30日、12月1日	いわき市
8	南相馬の現状と挑戦—被災地とともに歩む	2014年5月10日、11日	南相馬市
9	福島で子どもを育む	2014年8月30日、31日	伊達市
10	福島における伝統と文化の価値	2014年12月6日、7日	伊達市
11	測定し、生活を取り戻す	2015年5月30日、31日	福島市
12	Experience we have gained together (これまでの歩み、そしてこれから)	2015年9月12日、13日	伊達市
13	—今日の都路の状況—	2016年3月12日、13日	田村市都路地区
14	飯館村フォローアップダイアログセミナー “飯館村の今の経験をわちあう”	2016年7月9日、10日	飯館村
15	双葉地方におけるダイアログセミナー	2016年10月1日、2日	川内村
16	双葉・大熊の住民の方たちとの現状を共有する ダイアログ	2017年3月11日、12日	双葉町 楡葉町
17	私たちの未来のために、私たちに必要なこと	2017年7月8日、9日	伊達市
18	山木屋の住民の方たちと現状を共有するダイアログ	2017年11月25日、26日	川俣町山木屋地区
19	福島ダイアログ：南相馬、小高のいま、未来を共有する ための対話集会	2018年2月10日、11日	南相馬市
20	福島ダイアログ：福島第一原発事故のあとで：記憶を 残し、経験を共有し、あたらしい未来へ向かうために	2018年12月15日、16日	いわき市
21	福島ダイアログ：福島の復興はどこまで進んだのか —農業と漁業を中心として—	2019年8月3日、4日	南相馬市／いわき市
22	福島ダイアログ：9年間の軌跡について語る	2019年12月14日、15日	福島市



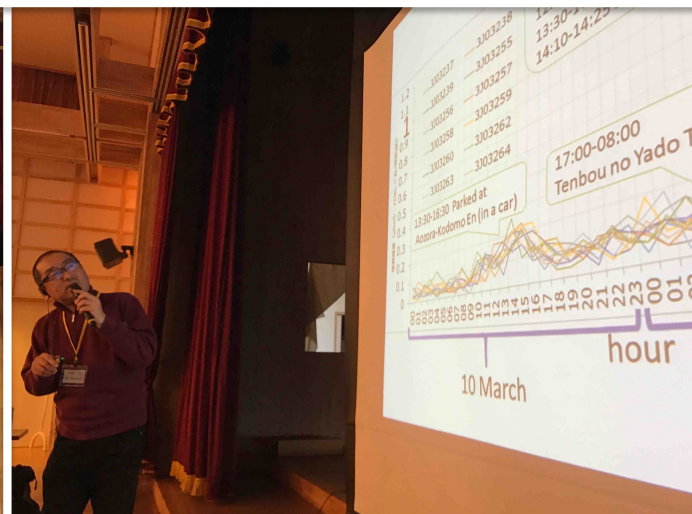
これまでのダイアログ開催地



第9回ダイアログ 2014年8月 伊達市 福島でこどもを育む

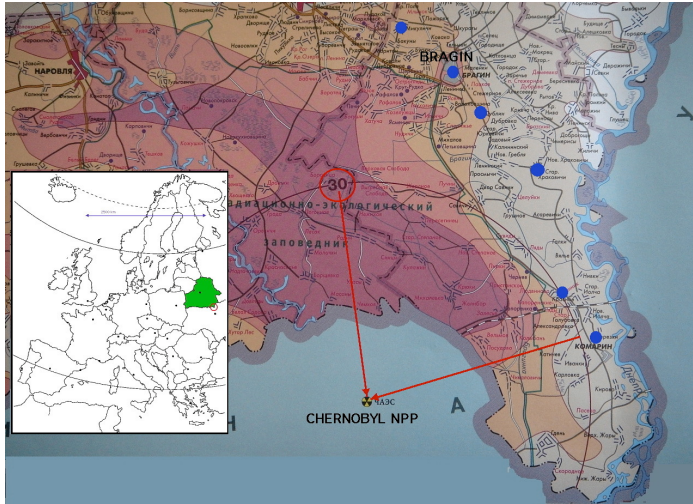


第16回ダイアログ 2017年3月 双葉町と大熊町の現状を共有する

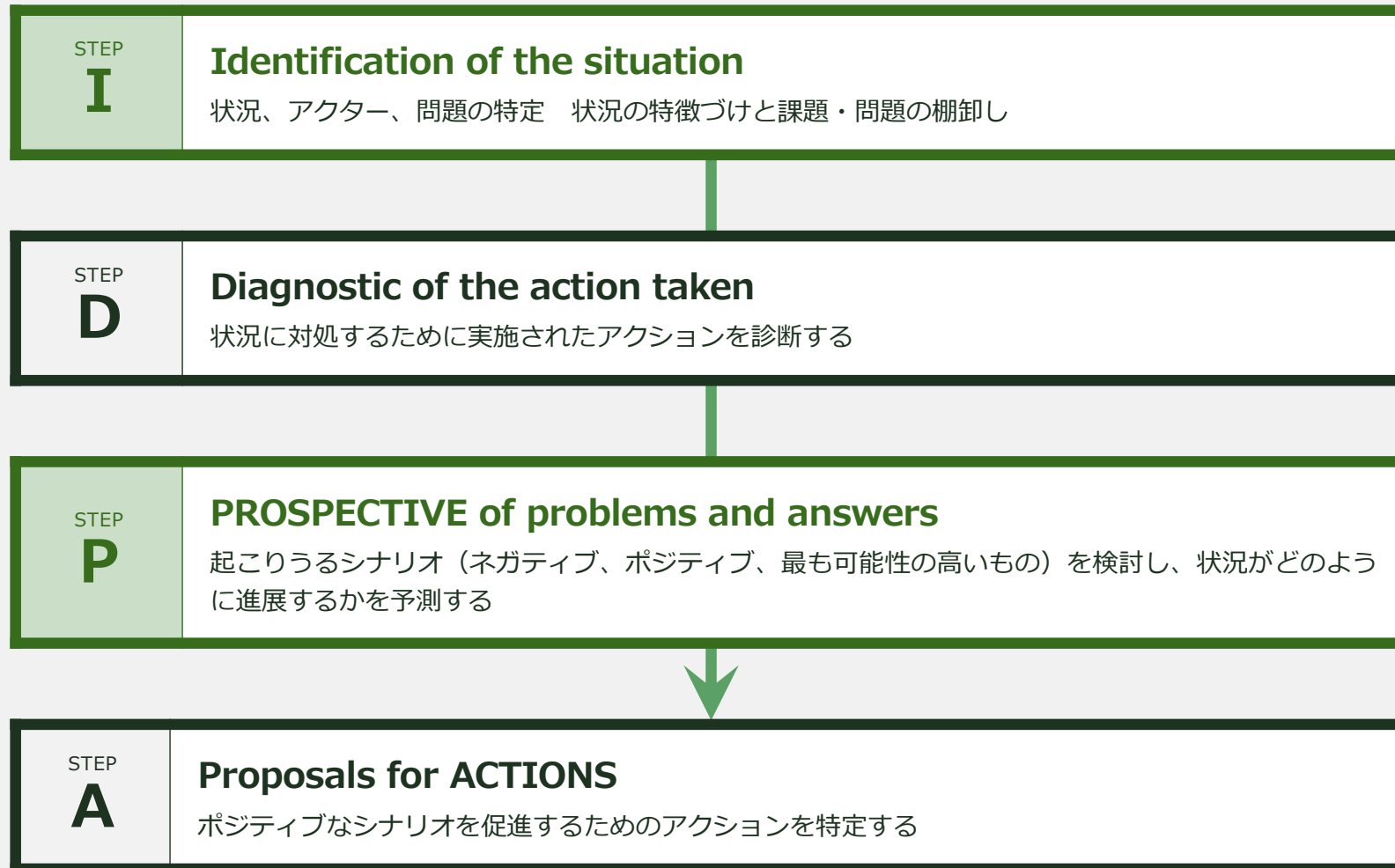


2. IDPEメソッドによる構造化された対話手法を採用

IDPAメソッド 1980年代 フランス アグロ・パリ・テックの Prof. Ollagnon考案
ステークホルダーが社会紛争課題について話し合うための アクティブ・リスニングの手法



IDPAメソッドを用いた構造化された対話プロセス



* 参考資料 : Dubreuil, G. H., Baudé, S., Lochard, J., Ollagnon, H., & Liland, A. (2010). The EURANOS cooperative framework for preparedness and management strategies of the long-term consequences of a radiological event. *Radioprotection*, 45(5), S199–S213.

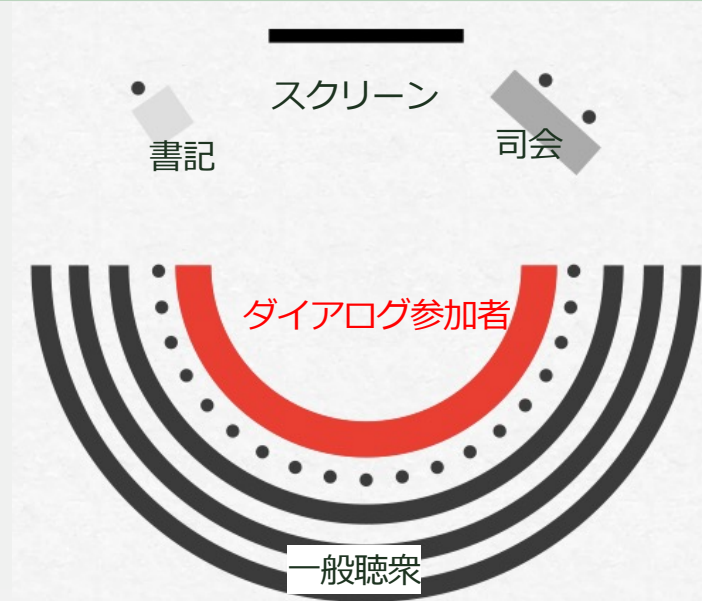
福島ダイアログの特徴

運営方法

- 午前中は情報共有のための発表（20分）6～8本
- ダイアログ参加者は10～20名
- 参加者は開催テーマによって主催が依頼
- 専門家、行政、団体、企業、一般住民、職業者、教育者など幅広く多様な属性の参加者
- IDPAメソッドの簡略版を用い、司会が2、3回質問を行う
- すべての参加者が割り当てられた同じ時間だけ、同じ質問に順に答えていく
- 途中で議論や質問は行わず、一巡するまで黙って解答を聞く
- 参加者間の直接の議論は行わない
- 会議の内容はすべて一般公開

背景にある思想

- ・ **参加者間の公平性 equity**
すべての参加者は平等に扱われる
発言機会、時間も平等となる
- ・ **透明性 transparency**
一般公開され、メディア取材も可
- ・ **包括性 inclusiveness**
可能な限りの多様な属性の参加者



* 参考資料 : Lochard, J., Schneider, T., Ando, R., Niwa, O., Clement, C., Lecomte, J. F., & Tada, J. I. (2019). An overview of the dialogue meetings initiated by ICRP in Japan after the Fukushima accident. *Radioprotection*, 54(2), 87–101.

共通の言葉を探す場としてのダイアログ

生活のリアリティを社会化する回路を構築する

* 参考資料：五十嵐泰正, & 安東量子. (2021). 専門知と地域の人々のあいだで：放射線リスクコミュニケーションの経験から. 年報社会学論集 = *The Annual Review of Sociology: Official Journal of the Kantoh Sociological Society*, 34, 45-53.

4. 福島ダイアログの今後と福島の将来

第23回ダイアログ 2021年11月 処理水をめぐる課題を福島で考える 世界と考える



処理水をめぐるダイアログでは…

- 東電、政府への不信
- 一方で、自分たちでできることはするという強い意志
- 賠償制度の問題
- 意思決定プロセスの問題
- 福島だけの問題ではない
 - 県外の人にも共有すべき問題
 - 同じような社会課題は福島だけではなくあちこちにある
自分たちの住む地域をよくしていきたい
そのためには ○○にはこうしてほしい（ほしくない）
自分たちは こうしたい
- 具体的な問題意識
- 他の人の意見を聞くことによってよりひろい視野に

* 参考資料 : Ando, R., Koyama, R., Schneider, T., Lecomte, J.-F., Isse, M., & Koyama, Y. (2023). Report on the 23rd Fukushima Dialogue “Thinking together about issues of Fukushima Daiichi treated water.” *Radioprotection*, 58(1), 5–10.
<https://doi.org/10.1051/radiopro/2023004>

安東量子, 小山良太, ティエリー・シュナイダー, ジャン＝フランソワ・ルコント, 一瀬昌嗣, & 児山洋平. (2022). 第 23 回福島ダイアログ「処理水をめぐる課題を福島で考える 世界と考える」報告. 保健物理, 57(2), 102–107.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhps/57/2/57_102/_article/-char/ja/

第24回ダイアログ 2022年11月 次世代と考える福島未来

福島にかかわる 大学生以上～35歳までの参加者10名



* 参考資料 : NPO福島ダイアログ http://fukushima-dialogue.jp/bk/202211_dialogue_record.html

若者のダイアログでは…

- 午前中 ーベラルーシの事例紹介 福島の報告

地元出身5名、県外から5名

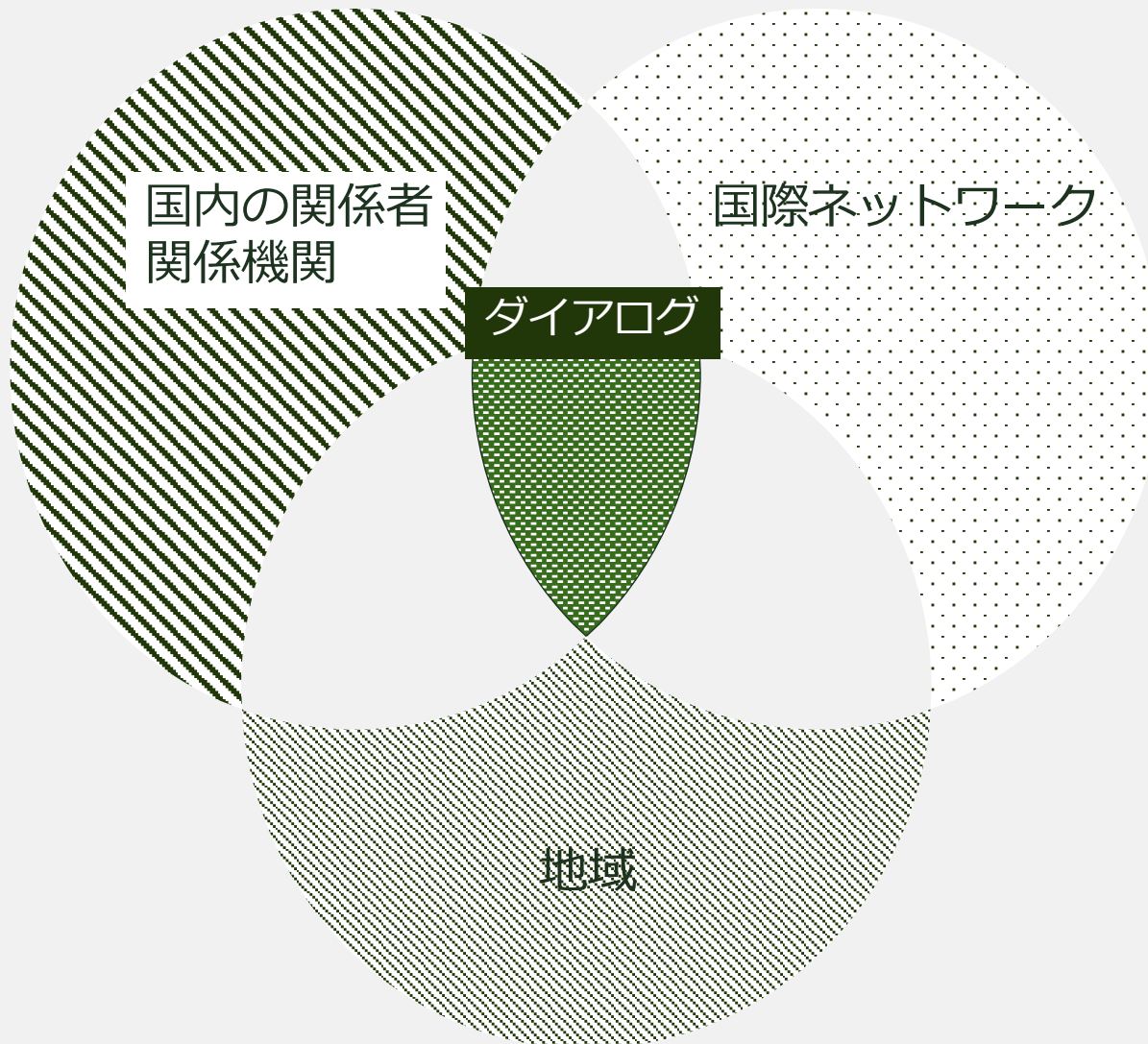
出てきた論点

- 「復興」の定義が噛み合っていない
- 外部からの支援が入ったことのよさと悪さ
- 「被災地」「被災者」として注目され続けることのよさと悪さ
- 生活の自律性、日常が回復できていない現状
- 政策に生活が大きく左右される
- 意思決定にかかわれないもどかしさと苛立ち
- 方向性を「一緒に」考えていきたいという希望

直近の2回の福島ダイアログでの議論から見えること

- 意思決定プロセスへのステークホルダーの関与の欠如
- そのことに対するステークホルダー、とりわけ、被災地住民のフラストレーション
- 事故後の経験が伝承されていない
- 望ましい未来を生み出すために、地域・国・世代を超えて継続的なダイアログを行うことの重要性

多様なステークホルダーによるひらかれた対話のプラットフォームを目指して



ねらい：

- 被災地における生活・労働環境の持続可能な改善
- 放射線防護文化と Co-expertise プロセスの普及
 - ：人びとの意思決定プロセスへ寄与を可能に
 - ：十分な情報を得たうえで自分の意見を展開・選択を行えるように

ステークホルダーが福島の将来を自分たちが作っているのだと実感できる対話の場づくりを目指します

賛助会員募集などの運営体制整備中。活動にご関心をお持ちの方はご連絡ください。
info@fukushima-dialogue.jp

Ethos in Fukushima 福島のエートス

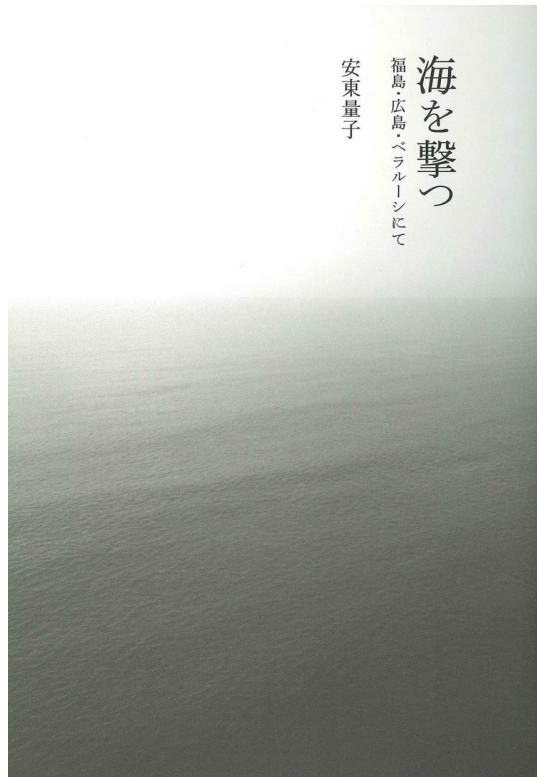
<http://ethos-fukushima.blogspot.com/>

- 動画『ドキュメンタリー：原発事故の後で、信頼を取り戻す・末続地区の経験』 <https://youtu.be/47sMGk87MuA>
- 『末続アトラス 2011ー2020：狭間の地域が暮らしを取り戻す闘いの記録』 <http://ethos-fukushima.blogspot.com/2022/11/2011-2020-27km.html>
PDF無料DL可

NPO 福島ダイアログ

<https://fukushima-dialogue.jp/>

- 『取っ手のないスーツケース』 2021, NPO福島ダイアログ
<https://fukushima-dialogue.jp/kiroku-project/>



『海を撃つ ー福島・広島・ベラルーシにて』2019 みすず書房



『末続アトラス 2011-2020 : 狭間の地域が暮らしを取り戻す闘いの記録』2022 福島のエートス (PDF無料DL可)



『スティーブ & ボニー 砂漠のゲンシリョクムラ・イン・アメリカ』2022 晶文社